

## 兵庫県教育会による教員の「支那満鮮視察旅行」 —「満洲国」建国直後を中心として—

宋 安寧\*

### 概要

本論文于众多的教师“支那満鮮視察旅行”的事例中选取兵库县教育会实施的该旅行行为例，论述了“満洲国”建国后的该旅行的特征。其特征主要表现为以下几点。

从实施目的来看，建国后，由原来的扩展教师眼界之目的转为认识理解“満洲国”建国意义。参加視察旅行的人员构成也发生了变化，兵库县行政人员增加，这意味着县当局对視察旅行的干涉力增强。視察城市地域由以往的中国各地向満洲朝鮮地域集中。而且，访问的各个地域城市，与其说是让教师理解该地域本身的历史文化，不如说是每个地域都包含了让教师深化理解该地域与“満洲国”的关系这一目的。细到参观景点也同样，一个明显的特征是增加了战争遗址参观的频度，且以往也参观的日俄战争遗址，重新赋予其新的目的，即让教师认识到日俄战争是达成“満洲国”建国这一目标先人们所付出的牺牲。中国名胜古迹也列入参观范围内，但是其出发点在于让教师理解“日支亲善”这一当时的政策口号。此外，值得一提的是，“満洲国”建国后，渡满日本人增加且人际关系网日趋密切，又加之三十年代初国际观光产业的发展，由此该視察旅行在某种意义上形同日本国内旅行，自始至终都进展得很顺利。

教师在当地听取了很有有关“王道主义”的建国理念及治安移民等“満洲国”所面临的各种问题的讲话。讲话者的意图在于，让教师自身理解“満洲国”现状的同时，也想通过教师回国后的宣传来试图缓解当时漫无目的的渡满倾向。回国后，教师通过旅行报告书宣传了“王道主义”的建国理念，可同时超越了“満洲国”行政官员的预料，也将建国后政局不稳的“満洲国”的侧面无意识当中传到了日本国内。

关键词：満洲 “満洲国” “支那満鮮視察旅行” 教育会 教师 “王道主义” 満洲移民。

### I はじめに

筆者は戦前日本人による植民地や占領地への旅行のうち、教員の「支那満鮮視察旅行」に焦点をしばり研究を進めている<sup>2</sup>。この視察旅行は、日露戦争終戦直後の1906（明治39）年に始まり、南満洲鉄道株式会社とジャパン・ツーリスト・ビューロー（現JTB）の協力によって広がりを見せた。「満洲国」建国を契機に最盛期を迎え、1940年代前半まで継続された。日本

\* 執筆者：宋 安寧

機関/役職：神戸大学大学院総合人間科学研究科 博士後期課程

機関住所：〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11

E-mail：song-a@st.ritsumei.ac.jp

近現代史研究の知られざる一面であるとの指摘もあるように、戦後長年にわたって注目されることがなかった<sup>3</sup>。しかしこの視察旅行は、植民地に対する日本人の認識の形成に深く関わっていたと考えられ、その実態および歴史的な性格を解明することは、日本教育史はもちろん、日本とアジア諸国との関係史を認識するうえで不可欠の作業であると考えられる。

本稿は、外務省や文部省・新聞社・民間会社・教育会<sup>4</sup>などさまざまな団体によって行われた教員の「支那満鮮視察旅行」のうち、兵庫県教育会の事例を取りあげる。兵庫県教育会による「支那満鮮視察旅行」は、1928（昭和3）年から1940（昭和15）年まで中断することなく計13回も実施された。管見のかぎり、最大規模の事例である。またこの時期は、満洲事変勃発（1931年）、「満洲国」建国（1932年）、日中全面戦争突入（1937年）等々、日中関係が悪化の一途を辿った時期に重なる。したがって兵庫県教育会の事例を取り上げることにより、「支那満鮮視察旅行」に附与された意味が日本の植民地政策（とくに対中国政策）の展開とともに、どのように変化していたのかをみるのが可能となる。

本稿で取り扱う時期は「満洲国」建国後とする。戦後日本においては「満洲国」研究が盛んに行われ、政治体制や経済制度、教育実態などの成果が続出していた。近年ミクロ的視点の研究も深まり、「満洲国」の宗教や建築・新聞・ラジオなどの研究成果も誕生しつつある<sup>5</sup>。本稿では視察旅行に参加した教員の「満洲国」認識を通して、当時の「満洲国」イメージのあり方を追う。「満洲国」建国前の視察旅行は、教員の見識を広げる研修的性質が強かったため、視察地は台湾や中国の江南地域・北京・山東地方など広い範囲にわたっており、名所旧跡見学が中心であった。「満洲国」建国後における動向に対する観察は、すなわち視察旅行の質的変容に迫るだろう。

日本人による植民地・占領地への旅行について、近年ようやく研究の端緒が開かれ、いくつかの成果が出された。主要なものとして高媛による一連の研究があげられる<sup>6</sup>。高は、帝国・近代・観光という三つの関係を解明する観点から、戦前戦後における日本人の「満洲」観光をトータルに取り扱い、「帝国圏」の膨張と崩壊に伴う「観光圏」の伸縮過程を明らかにした。

そのほか学生の修学旅行と一般市民を対象とした観光旅行に関する研究がある。修学旅行については、渡部宗助が1906（明治39）年の旅行の実態を考察した<sup>7</sup>。その後女子高等師範学校の修学旅行に注目が集まり、内田忠賢<sup>8</sup>と伊藤健策<sup>9</sup>がそれぞれ東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校の事例を取り上げ、女子学生大陸認識の特徴を分析した。また長志珠絵は東京女子高等師範学校と奈良女子高等師範学校の事例を帝国と学校との関係に着目して考察した<sup>10</sup>。その後高等商業学校の事例を扱う研究も出された。阿部安成は山口高等商業学校の「支那満鮮修学旅行」に注目して、戦跡見学がもつ意味と学生の「大陸認識」を明らかにした<sup>11</sup>。観光旅行に関しては、荒山正彦が『満支旅行年鑑』『国都観光バス案内』など当時発行された観光案内の史料を利用し、旅行業者の発展、観光団体数・客数の統計・参観ルートなど「満洲」観光旅行の実態を明らかにした<sup>12</sup>。

かかる研究史をふりかえっても、教員を対象とする「支那満鮮視察旅行」を本格的に考察した研究はみられない。「臣民」として生活しつつ、「教師」として次世代を育成した彼等はそこに何を発見したのか、以下に解明して行きたい。

## II 実施経緯と実施目的

### 1 実施経緯

「満洲国」建国直後の1932（昭和7）年から1934（昭和9）年までの視察旅行の実施経緯および準備状況について、表1に整理した。表1によると、視察旅行準備の手順は「満洲国」建国前と同じく、まず幹事会で視察地や視察時期などを検討した後に参加者を募集、応募者のなかから兵庫県教育会の詮衡により参加者を決定したことが判明する。しかし準備事項について

表1 小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の準備事項

年	月 日	準備事項
1932 （昭和7）年	4月6日	・幹事会で本年度の視察旅行先を「満洲国」とし、希望者の募集提案。
	5月20日	・幹事会で視察旅行の詳細を次のように決定。 ①申込者の詮衡：8名に決定し直ちに通知。②期日：6月5日に出発し6月23日に帰任 ③団長：幹事・大塚勝治。視察者打合せ会を5月21日に開催。午後1時より、視察旅行団の打合せ会を教育会館で開催。
	5月21日	・視察旅行に関し森棟二主事が大阪満鮮案内所に出張。
	6月1日	・幹事会で視察旅行の出発時刻を6月5日の午前8時5分、神戸駅発の列車と決定。
	6月2日	
1933 （昭和8）年	4月28日	・幹事会で視察旅行団の計画を検討。
	5月11日	・幹事会で視察旅行の計画案を協議。
	5月30日	・幹事会で視察旅行団を再検討。南洋方面で計画を立てたが、最終的に本年度も満洲で皇軍慰問を行い、6月下旬の出発することに決定。南洋の希望があり調査したが、円安のため満鮮に決定。
	6月17日	・幹事会で視察旅行の参加者の詮衡を行う。
	6月19日	・幹事会終了後、兵庫県教育会主事森棟二が大阪に出張する。
1934 （昭和9）年	4月30日	・第2次理事会、「満洲支那地方旅行希望者募集の件」を検討。
	5月18日	・第3次理事会において、「満洲視察団参加者詮衡の件」を検討。
	6月2日	・満洲朝鮮中国視察旅行の打合せ会を開催。従来の満鮮コースに「北支那」を加え北平まで行くことを決定。

[注] 『兵庫教育』第511号（1932年5月15日）、161頁、同512号（1932年5月15日）、140頁～141頁、同513号（1932年7月15日）、203頁、同524号（1933年7月15日）、195頁、同525号（1933年7月15日）、176頁、同536号（1934年6月15日）、189頁、同537号（1934年7月15日）、183頁に掲載された記事より筆者が作成。

「満洲国」建国前後を比較すると、二つの違いがみられた。①参加者の募集方法が変化したこと、②外務省へ視察地の安全情報の確認がなくなったこと、である。以下、二つの点を検討しよう。

①参加者の募集方法。幹事会で視察旅行の具体的事項を口頭で会員に伝え、会員を介して参加者を募集するという従来の方法とは異なり、兵庫県教育会の機関誌である『兵庫教育』に募集要項を掲載し参加者を募集するという方法を採用した。たとえば1932(昭和7)年の募集要項は次のとおりである。

#### 新満洲国及朝鮮視察団の参加者募集

- 一、視察地 新満洲国及朝鮮  
豫程 京城、平壤、安東、奉天、新京、吉林、哈爾賓、齊々哈爾、大連 但シ都合ニ依リ多少ノ変更アリ。
- 二、六月初旬ヨリ約十八日間(都合ニテ一、二日増十九日又ハ二十日)。
- 三、旅費 約二百円。
- 四、補助金 本会ヨリ右旅行者ニ対シ一人ニ付金一百円ヲ支出ス。
- 五、団員数 八、九名。
- 六、申込期日 五月十日ヨリ五月十六日マデノ間トス。
- 七、旅所中ハ団体行動ヲ共ニシ本会ノ指図ヲ厳守スルコト途中離脱スルトキハ其後ノ費用ハ自弁トシ且ツ残金ノ旅費ハ返戻セズ。
- 八、申込ミ 右参加希望者ハ本募集書ヲ御熱知ノ上所属ノ郡市教育会長又ハ教育団体長ヲ経テ申込金貳拾円也ヲ添ヘ期限内ニ本会着ノ見込ミヲ以テ申込ムコト但シ申込金ハ旅費ノ中ニ繰込ム、尚申込金ハ本会ノ都合ニテ中止又ハ参加ヲ断リセシ場合ノ外ハ如何ナル事情アルモ返戻セズ。
- 九、申込者多数ノ場合ハ本会ニ於テ適当ニ詮衡ス<sup>13</sup>。

このように募集要項には視察地・視察期間・旅費・申込方法などが詳細に記された。また「新満洲国及朝鮮視察団の参加者募集」という見出しに示されたように、従来の「海外視察旅行」という名称ではなく、「新満洲国」を使用した。つまり海外旅行とは区別して「新満洲国」を特別の地域と見做して訪問したのである。このうち特に注目されるのは旅費である。旅費は200円であり、うち兵庫県教育会が半額(100円)を補助すると明示される。100円という金額は当時の小学校本科正教員の月給を上回り、相当の金額であったといえよう<sup>14</sup>。本事業に対し、兵庫県教育会が大きな力を注いだことがうかがえる。

②外務省への事前の安全情報確認の照会をしなくなったこと。「満洲国」建国前は、視察旅行の準備段階で外務省へ現地状況の確認が行われていたが、「満洲国」建国後になるとそれは

行われなかった。なぜなら「満洲」は実質的に台湾や朝鮮と同じように日本の「領土」と認識され、視察旅行は国内旅行の延長となったため、視察旅行の手続きが簡素化されたと考えられる。また表1にみられるように、兵庫県教育会主事であった森棟二は大阪の満鮮案内所で視察旅行に関する情報を収集しており、事前準備は旅行の連絡機関で済ませることができた。また「満洲国」建国後にいたると、大阪満鮮案内所のような南満洲鉄道株式会社に所属する満洲旅

表2 1932（昭和7）年～1934（昭和9）年の「支那満鮮視察旅行」の視察者

年度	視察者	所属	職名
1932 （昭和7）年	大塚勝治	兵庫県教育会	幹事
	高谷正義	兵庫県	視学
	常見勇蔵	神戸市西灘第一尋常小学校	校長
	中島節太郎	有馬郡三田尋常高等小学校	校長
	前田菊治	城崎郡豊岡尋常高等小学校	校長
	荻谷俊次	赤穂郡住吉尋常高等小学校	校長
	三宅照夫	朝来郡生野尋常高等小学校	校長
	坂本精一	武庫郡住吉尋常高等小学校	訓導
	植永定治	兵庫県三木高等女学校	教諭
	山田景行	神戸市女子商業学校	教諭
1933 （昭和8）年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	生島芳三郎	兵庫県	視学
	谷口幹治	神戸市兵庫尋常小学校	校長
	崎谷繁太郎	武庫郡武庫小学校	校長
	近本清喜	出石郡小坂小学校	校長
	田畑広治	御影師範附属校	訓導
	中川精一	神戸市灘尋常小学校	訓導
	細見隆一	多紀郡福住小学校	訓導
	畠中長三郎	日置小学校	訓導
	藤原吉太郎	兵庫県立農学校	教諭
	朝枝敏之	兵庫県立工業学校	教諭
1934 （昭和9）年	江口重吉	兵庫県教育会	幹事
	阿部邦一	兵庫県学務課	課長
	嵯峨彌一郎	兵庫県	視学
	瀧本英八郎	灘高等小学校	訓導(商)
	有方節雄*	湊川尋常小学校	訓導
	柴原稔	武庫郡山手尋常小学校	訓導
	蔭山忠雄	武庫郡本庄尋常高等小学校	訓導
	野木勇	兵庫県立農学校	教諭(正八位 歩兵少尉)
	大鞆保	兵庫県立尼崎中学校	教諭
小島修	尼崎市立商工実修学校	助教諭	

[注] 1 『兵庫教育』第517号（1932年11月15日）、140頁、同第525号（1933年7月15日）、153頁より作成した。

2 1934（昭和9）年の視察者の所属と職名は『兵庫県学事関係職員録』（昭和9年度）より確認した。

3 \* 有方節雄は『兵庫県学事関係職員録』によれば有方節男と表記されている。

行幹旋機関の設置数が急増し、「満洲国」観光バスも開設されるなど、インフラ整備が徐々に進んでいた<sup>15</sup>。視察旅行の「普及」は観光事業の発達にもよるが、その背景には植民地支配形式の高度化・成熟化を見落としてはならない。

「満洲国」建国後に実施された視察旅行の視察者を整理したものが表2である。建国前と比べると、表2に示した視察者には次の三つの特徴がみられる。

第1点は、小学校長の割合が減少したことである。31名のうち小学校長は8名で全体の26%を占めており、「満洲国」建国前よりも27ポイント減少した。その一方で、中等教育機関の教員が増え7名で全体の23%を占めた。

第2点は、視察者が所属する校種が多様化し、工業学校・農業学校・商業学校の教員が初めて参加したことである。とくに1934(昭和9)年は商業科を担当する小学校教員が参加し、また兵庫県立農学校の野木勇のように軍人経験をもつ教員が参加した。その理由は「満洲国」建設に尽力する実業面の人材が必要となったため、その養成の任務を担う教員に「満洲国」を認識させるためであったと考えられる。

第3点は、兵庫県職員の参加が増えたことである。表2に示したように、3回とも県視学が参加しており、とくに1934(昭和9)年には兵庫県の学務課長が参加した。「満洲国」建国前の視察旅行においては、1928(昭和3)年に県視学が参加した以外、他の年度には県当局の参加者はいなかった。このように県当局の行政職が多く参加したことは、視察旅行に県当局が関与するようになったことを意味していると考えられる。

## 2 実施目的

1932(昭和7)年の視察旅行の目的は「昭和七年度本会会務報告書」のなかで次のように記された。

昭和三年以来海外視察団ヲ組織シ南支那、中部支那、北支那及滿蒙、朝鮮地方ニ派遣シ多大ノ効果ヲ収メタルニ鑑ミ、本年ハ滿洲事変後ナルヲ以テ在滿皇軍慰問ヲ兼ネ滿鮮視察ヲ計画シ<sup>16</sup>。

これによると兵庫県教育会は、従来の「支那滿鮮視察旅行」の効果を認め、「満洲国」建国後も継続して視察旅行を実施しようとしたことがうかがえる。その目的は、1931(昭和6)年9月18日に起こった満洲事変のため、「満洲」の軍隊を慰問することと「満鮮」を視察することの二つであった。当初は「満洲国」へ訪問することは言及されていなかったが、後に発表された報告書には満洲事変の経過や意義などが詳細に記録されており、1932(昭和7)年の視察旅行は「満鮮」の事情を視察するほかに、「満洲」の軍隊への慰問および満洲事変を視察者に理解させることが重視されたのである。

1933（昭和8）年の視察旅行の目的は次のように記された。

満洲事変は我邦生命線の確保と満洲国独立と其の所産を<sup>マ</sup>として見るに至ったのである、之は全く極東大局の画期的転向であって国民の関心もまた今更の如く鬱然として興ってきたわけである。故に教育者としては此際実地の研究が緊要であるから茲に我兵庫県教育会は満蒙視察団の派遣を企て左の使命を果たすことに努めた。第一、在満皇軍将士達の御労苦に対する感謝と慰問。第二、満洲国の新生を慶祝し日満両国教育者の親善に寄与せんことに努むること。第三、満蒙及朝鮮の視察研究<sup>17</sup>。

これによると、兵庫県教育会は満洲事変後に「満洲」への日本人の関心が強まったなかで、教員として「満洲」を実地研究する必要性を自覚して視察旅行を企画したのであり、その目的は次の3点であった。第1点は、「満洲」に駐在する日本軍を慰問することである。第2点は、「満洲国」を訪問し日本の教育者と「満洲国」の教育者との交流をはかることである。第3点は、満蒙と朝鮮の事情を視察することである。

また1934（昭和9）年の報告書は1933（昭和8）年までのように目的が明確に示されていないが、「朝鮮満洲中国視察団旅行報告」の次の記述から推測することができる。

今回の長途の旅行に於いて真に満洲事変なるものの意義が了解された……満洲事変なるものは……満洲全国を関東軍の力の下に摺伏させて了ったのであって日露戦争でも出来なかつた満洲の支配性が完全に達成されたのである。乃ち之を国防上から見ると日本の国防線が満洲の外延迄保障されたのであり、之を政治的に見れば満洲の排日政治が根底から顛覆されたものであり、之を経済的に観れば日本の経済単位が日満合体して国民生活を保障する事が出来る筋合に成ったのである。之は我国の宿望であり国民生存上の必然的要求であることは勿論ではあるが、斯かる大事業を執行し得たことは天皇陛下の御稜威に依ることは勿論なるが瀑流的に満洲を席捲した関東軍の勇断果敢に依ることと実に大なりしを忘れてならぬ……満洲国の一路堅実なる驚異的発達を遂げつつある現状を如実に観じて更に此の満洲国を完成しめて完全なる国際間の一成員たらしむることは我等九千万同胞の双肩に課せられた重大なる責任である<sup>18</sup>。

これによると、満洲事変の意義について国防・政治・経済の面から詳しく述べられており、満洲事変を関東軍の偉業、「天皇陛下の御稜威」、日本国民の生活上において必然的な要求であると視察者は理解していた。この解釈から推測すれば、1934（昭和9）年の視察旅行の目的として、満洲事変の意義、「満洲国」建国の意義を視察者たちに理解させることが一層重視されたことがうかがえる。

このように「満洲国」建国後の教員の「支那満鮮視察旅行」においては、満鮮事情の視察・関東軍慰問のほか、満洲事変の意義、「満洲国」発展状況の認識、日本の正当性アピールが最も重視された。周知の通り、「満洲国」建国によって「満洲」を実質的に占領した日本は国際世論の厳しい非難を受けた。「満洲国」承認問題をめぐって、1933(昭和8)年2月24日の国際聯盟総会では「満洲国」承認案が否決され、日本は聯盟を脱退した。国際的孤立に陥った日本は、少なくとも国内的に満洲事変および「満洲国」建国の意義を理解させようとしたのであり、兵庫県教育会もまさにこれを視察旅行の目的として重視したのである。

### Ⅲ 視察旅行の実態

#### 1 視察ルートの「満鮮」集中

上述の目的を達成するために考えられ、実施された視察行程はどのようなものであったか。その詳細を整理したのが次の表3である。

表3にある如く、1932(昭和7)年から1934(昭和9)年までの視察ルートは「満鮮」地方に集中していた。各年の視察地で共通したのは京城・平壤・安東・奉天・撫順・大連・旅順・長春・ハルピンであり、「満鮮」の重要な都市が数多く含まれていた。

各回の視察ルートを比較してみると、次の3点の特徴がみられる。

第1点は、1932(昭和7)年の視察旅行では「満洲国」の首都であった新京(長春)の視察が最も重視され、湯崗子が視察ルートに加えられたことである。新京は建国直後の「満洲国」政府機関を訪問するためであった。湯崗子は、予定していたチチハルの視察が治安の問題で中

表3 「支那満鮮視察旅行」の視察ルート

年 度	期 間	視察ルート
1932(昭和7)年	6月5日～ 6月23日	神戸⇒下関⇒釜山⇒京城⇒仁川⇒京城⇒平壤⇒安東⇒奉天⇒撫順⇒奉天⇒長春⇒吉林⇒長春⇒ハルピン⇒長春⇒鞍山⇒湯崗子⇒大連⇒旅順⇒大連⇒神戸
1933(昭和8)年	6月26日～ 7月12日	神戸⇒大連⇒旅順⇒大連⇒関東州⇒鞍山⇒奉天⇒撫順⇒奉天⇒チチハル⇒ハルピン⇒長春⇒吉林⇒安東⇒平壤⇒京城⇒神戸
1934(昭和9)年	6月11日～ 6月30日	神戸⇒下関⇒釜山⇒京城⇒平壤⇒安東⇒奉天⇒撫順⇒奉天⇒長春⇒ハルピン⇒長春⇒奉天⇒山海関⇒北京⇒天津⇒大連⇒旅順⇒大連⇒門司⇒下関⇒神戸

[注] 『兵庫教育』第517号(1932年11月15日)、113頁～117頁、同第518号(1932年12月15日)、71頁～89頁、同第519号(1933年1月15日)、47頁～68頁、同第526号(1933年8月15日)、205頁～218頁、同第540号(1934年10月15日)、141頁～172頁より筆者が作成。

止されたため、臨時に追加されている。その理由は、湯岡子が有名な温泉地であり視察途上の疲労を癒すためのみならず、同地は「現満洲国執政溥儀氏が就任前天津より逃れて」休養した場であり、ゆえに視察者をして「極めて意義深く感じ」せしめる効果もあった<sup>19</sup>。

第2点は、1933（昭和8）年の視察旅行ではチチハルが追加され、朝鮮の視察が簡略化された。帰国の経路で京城・平壤が視察されたのみである。チチハルは1931（昭和6）年に関東軍が新たに獲得した中国領土であり、1932（昭和7）年はそこに駐在する関東軍慰問のため視察ルートに加える予定であったが、占領直後の治安を懸念して視察を取りやめた<sup>20</sup>。1933（昭和8）年の視察ルートには、治安面での懸念なくなったためか、再び加えられた。

第3点は、1934（昭和9）年の視察旅行では、山海関・北京・天津が新たに視察ルートに加えられたことである。その理由は、「満洲国建国後心臓部たる奉天と中華民国の旧都北平とを結ぶ唯一の鉄道として交通上極めて重要な地歩を占める」<sup>21</sup>奉山線が満鉄によって接収され、満洲から山海関経由で北京・天津に移動することが便利になったからであろう。

次に、各都市に如何なる視察目的が期待されていたのか概観しよう。前述の通り、京城・平壤・安東・奉天・撫順・大連・旅順・長春とハルピンは毎回訪問地に入っている。これらの都市について、兵庫県教育会幹事・1932（昭和7）年視察旅行団団長の大塚勝治は「李朝三百年の京城、高勾麗箕子の平壤、愛親覺羅氏勃興の吉林・撫順・奉天……希望に燃ゆる新満洲国の首都長春、日支露三国角逐の哈爾濱」<sup>22</sup>と各地域の特徴を述べたように、まず各地域が有する歴史および日本との関係を視察者たちに認識させることが主要な目的であった。

建国後になると、これらの地域と「満洲国」との関連性を視察者たちに認識させることが重視された。そしてこの効果は各都市に対する視察者たちの感想からうかがうことができる。とくに注目すべき視察地は、京城・安東・大連・奉天・山海関であった。

京城は上述のように朝鮮の歴史を代表する都市として視察したほか、「満洲事変勃発後に於ける帝国の内外に対する施設に大なる刺激を受け、又精神作興自力更生等の普及徹底に伴って物心両方面に互り著しき変化好調を呈しつつある」<sup>23</sup>と兵庫県立尼崎中学校教諭大鞆保が述べたように、満洲事変が朝鮮に与えた積極的な影響を認識するという目的も含まれていた。

安東について、団長の大塚勝治は「光緒二十年日清戦争の際、我軍が之を占領して以来、急速度の発展となり、日露戦役の際には我軍の兵站の要地となり、軍用軽便鉄道の機転した……明治四十年安奉線の広軌鉄道開通と共に鴨緑江鉄橋も竣成した」と、該地をとりまく日清・日露戦争の歴史および満鉄による開発の業績を述べるとともに、「本市の発達の上に我国の払った犠牲努力の大なることを思うと、今日満洲が我国の生命線として、永却の縁のあった」<sup>24</sup>と、安東と「満洲」発展の関係を強調した。

大連については、「実に大陸の関門、欧亜連絡の要街であり、又我が特殊地域たる満洲国の大玄関である……港の設備の完備せる点は東洋一である。大連港の背後地は広漠たる満洲国にして、その全貿易の七割はここで取引せられる」<sup>25</sup>と、大連の地理的位置の重要性、および

「満洲国」経済発展に果たした役割に、注目している。

奉天については、「満洲に特殊の権益を存する我国は特に重要視して、満洲経営のため全力を注いできた。殊に日露大会戦の地として、脳裏に徹して居るだけではなく、近くは昨年事変最初の突発地として、更に新満洲国胚胎であるだけに、吾人の印象又新なるものが多い」<sup>26</sup>と、奉天と日本との緊密な関係、とくに「満洲国」誕生に果たした役割を認識している。また「多くの商舗が色採燦然たる旗又は漆金看板等濃厚なる装飾をなし高音高調の支那楽を奏して実に繁華を極めて居る」との奉天の市内のにぎやかな様子、「満洲国人も王道楽土を楽しんでいる如く顔面も愉快そうに見受けられた」<sup>27</sup>と、「王道楽土」という「満洲国」の建国理念が実現されていると受け止めた報告もあった。

山海関は、「南門は攻撃の際に尊き犠牲となった児玉大尉始め我が勇士の眠れるところ」<sup>28</sup>と、満洲事変と関係した場所として視察された。さらに「地理的に人文的に満洲国と中華民国との境界なる長城の一角に立ちて我等日本人に負はされた使命の重且大なることをしみじみと感ぜしめられた」<sup>29</sup>との感想を述べ、山海関を境界地としてとらえ、「満洲国」と中華民国との分離独立関係維持こそが日本人の使命であると自覚したのである。

## 2 視察場所の特徴

視察旅行の目的を達成するために、団員は各都市でどのような場所を視察したのだろうか。

表4 「支那満鮮視察旅行」の視察場所

都市	戦跡			史跡			資源産業地			教育機関			官庁			部隊			神社			博物館等施設		
	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9	S7	S8	S9
釜山																			1					
仁川							1		1															
京城				2	1	5				4	2	3	1	2	1							1		2
平壤	4		1			1				2														1
安東	1						2												1			1		
奉天	2	1	2	2	1	2				1		1	1	1	1	1			1			1	2	1
撫順							1	1	1															
長春	2	2	2									1	2	2	3									
ハルビン	1	1								3	3		1	1		1	1							
大連							4	3	5	1	1		1											1
旅順	8	5	5																					1
吉林				3												1								
鞍山							1	1	1															1
湯岡子																								1
チチハル																		1						
錦県						1									1									
山海関			1			1																		
北京			1			11									1			1						
天津			1																					
合計	18	8	14	7	2	21	9	5	8	11	6	5	6	6	6	3	2	1	3	0	0	6	2	4

[注] 『兵庫教育』第517号(1932年11月15日)、113~117頁、同第518号(1932年12月15日71頁~89頁)、同第519号(1933年1月15日)、47頁~68頁、同第526号(1933年8月15日)、205~218頁、同第540号(1934年10月15日)、141頁~172頁より筆者が作成。

視察場所およびその数を整理したものが表4である。表4によると、各都市で戦跡・史跡・資源産業地・教育機関・官庁・部隊・神社・博物館を視察している。

視察場所の特徴として次の5点が挙げられる。第1点は、戦跡の視察数が最も多く、3回の視察で合計40ヶ所に上がったことである。「満洲国」建国前の視察旅行（13ヶ所）と比べると3倍になった。これは満洲事変の意義を理解するために、従来の日清・日露戦跡に加えて、新たに奉天の北大宮、長春の南嶺、寛城子など満洲事変に関わる戦跡が加えられたためであり、満洲事変の意義を理解させるための戦跡視察が最も重視された。戦跡で視察者たちは、満洲事変を経験した軍人から事変の原因や経過、戦闘の様子、兵士の死傷者数などの詳細な説明を受けており、これらを聞いた視察者は「戦捷を得ました原因は……我軍各幹部が状況判断と之に伴う決心が頗る迅速であり精確にして迅速を極めた攻撃を断行した事と我が兵員が又よく重大なる事態を理解して、一身を賭して奮闘した結果による」<sup>30</sup>と述べ、日本軍の勝利が軍の指導者の迅速な決断と兵士の勇敢な戦いに起因したとの認識に至った。

また視察者たちは日露戦跡に満洲事変との関連性を見出そうとした。奉天における日露戦争の戦死者を祀る忠霊塔を見学した後、「国家的大経営の裡面是等英霊の存するを思い、今亦まざまざと満蒙の野に戦うの将士を見る」<sup>31</sup>と感想を述べ、日露戦争の兵士だけではなく満洲事変の兵士にも敬意を表し、日露と「事変」の連続性を見出さんとした。

第2点は、見学した史跡は合計30ヶ所、「満洲国」建国前（112ヶ所）と比べると、1/4まで激減したことである。その理由は二つあり、一つは満洲に史跡が少なかったからであり、いま一つは視察目的が満洲事変や「満洲国」建国の意義を認識することにあつたため史跡視察に重点が置かれなかったからである。また史跡視察といっても、中国一般の歴史文化を理解するためだけではなく「満洲国」建国の意義を視察者たちに認識させる目的があつた。たとえば奉天の北陵を見学した視察者は、「新興満洲国のために深甚の敬意を表した」<sup>32</sup>との感想を述べており、清朝の皇帝の陵墓としてではなく、「満洲国」の始祖の墓としている。つまり、視察者は北陵に「満洲国」との接点を見出そうとしていたのである。

したがって史跡視察は、「日満支」の親善を史的に確認する観点から実施されたといえる。そのため1934（昭和9）年の視察旅行では、車中泊で滞在期間を一日増やしてまで北京での視察時間が捻出され、とくに史跡を中心に視察が行われた<sup>33</sup>。この北京滞在の3日間では、万寿山やラマ廟（雍和宮）・孔子廟・故宮博物院・天壇など計21ヶ所の史跡を視察した。視察者たちは史跡の雄大さに感心する一方、「乾隆帝時代の佛は全く無く今は殆んど荒廢に委せられて顧みられないのは誠に遺憾千万に感じた」<sup>34</sup>と荒廢した孔子廟に落胆した。

第3点は、産業資源地の視察が重視され（合計22ヶ所）、撫順の炭坑、鞍山の製鉄所、満鉄資源館、大連の大豆油生産工場などの満洲の重要な産業資源地があまねく視察されたことである。「満鉄の生命に大関係のある——という我が帝国の生命に大関係ある」<sup>35</sup>といった撫順炭坑の視察感想、「満蒙は天産豊に、沃野津連る世界の宝庫なることを実物教育によって再認識し、

名実ともに我が生命線たることを強く感じた次第である」<sup>36</sup>との満鉄資源館の感想などに示されたように、産業資源地の参観には「満蒙生命線論」を深く認識させる意図が含まれていた。この「満蒙生命線論」は、関東軍の対ソ戦略から生まれた発想であり、その代表的なものは、1920年代後半における石原莞爾の満蒙領有論<sup>37</sup>や松岡洋右の満蒙に関する諸発言である。「満蒙は日本の生命線である」という松岡の発言は当時の日本社会に広く流布し、大恐慌の後「満洲」進出による現状打破の機運に期待を寄せた軍部や財界からの支持を受けた<sup>38</sup>。「満洲国」建国後はその意義が一層重視され、産業資源地見学は視察者たちに「満蒙生命線論」を実感させる装置だったのである。

また産業資源地の視察には、教科書の記述を視察者たちに再確認させるという目的も含まれていた。たとえば、三泰油坊(大連にある大豆油の生産工場)を視察した後、1933(昭和8)年の視察団長・兵庫県教育会主事森棟二は「工場にはいると禪もつけぬ素裸の人間が無数に働いている、これも教科書にあるから教員はぜひ一度は見て置きたい」<sup>39</sup>と述べ、教科書での記述通りの「後進性」を発見した。

第4点は、前述の日満教育者の親善を図るという視察目的を達成するため、多くの教育機関を視察したことである。とくに注目すべきは、ハルピンにおけるロシア人の子弟を対象とするルスキトン小学校、日本人が創立し中国人子弟を対象とする奉天公学校であった。ルスキトン小学校について視察者は、「此の学校の職員生徒挙っての我一行に対する歓迎ぶりは白系ロシア人の日本帝国に対する好感情と信頼の象徴だと信ずる。彼らは日本の手によって満洲に彼ら安住の国を作って貰いたい」<sup>40</sup>と述べ、白系ロシア人の日本に対する信頼や「満洲国」樹立を歓迎する態度を強調した。奉天公学校については、「満鉄が教育機関の整備と成績の向上に多大の努力を加ふるはもとより、附属地内の満洲国人即ち中国民子弟の教育に力を添えること多大なものである」<sup>41</sup>と、日本人が植民地の人々の教育に貢献していることをアピールした内容がみられた。このように教育機関の視察は、教育事情の視察にとどまらず、教育現場から「満洲国」建国後に生じたプラスの変化の認識へと拡大する。

第5点は、張学良別邸跡の視察に新たな意図が含まれていたことである。1929(昭和4)年の視察旅行でもこの場所が視察されたが、単なる観光スポットとして扱われたにすぎず、視察しており、視察報告書を見るかぎりこの場所に対し教員はとくに何の感想も述べなかった。しかし「満洲国」建国後、この視察場所には新たな効果が期待された。すなわち「暴戻凶悪無道の張学良が、栄華三昧に耽った……勢威を全支に振った作霖、我が帝国の絶大の恩恵を忘れて、怨を以て報いんとした作霖、満蒙には新国家生れて生々の気は昇天、子学良は北平にさまよふ……苛斂誅求至らざるなき無道の学良」<sup>42</sup>との感想からうかがえるように、張学良がかつて「満洲」で実施した「悪政」を視察者たちに認識させるためであった。後述する「満洲国」の要人の講話からうかがえるように、張学良の「悪政」と「満洲国」の「王道」を比較させることによって、「満洲国」建国の正当性が主張されたのである。

### 3 視察旅行を支えた現地日本人ネットワーク

「満洲国」建国後、排日の機運が強まり「馬賊」<sup>43</sup>の襲撃も頻繁に起こった。たとえば1932（昭和7）年の視察報告書によると安奉線の本溪湖を訪れる2日前に「馬賊」の襲撃があり、

表5 現地日本人との交流

年 度	視察地	現地日本人の支援
1932年 （昭和7）年	釜山	ビューロー案内所員及釜山駅助役長瀬明治の案内で龍頭山神社に参拝。
	京城	総督府では藤谷視学官の応接で昼食の饗を受ける。
	平壤	鉄道局嘱託張沐天の案内で視察。
	奉天	南満中学堂の三村歆次、ビューロー佐長利太郎氏などの出迎えと案内を受ける。ビューローの佐長氏および奉天医科大学学生栗原春雄の案内で視察。三村の案内で第一流支那料理を食事し、満洲国に関する所感を聞く。
	撫順	駅でビューローの澤田賢治氏の出迎え、江川撫順駅長の挨拶を受ける。駅前のビューロー撫順案内所に休憩し、澤田氏から炭坑についての予備知識を得る。
1933年 （昭和8）年	チチハル	駅で黒龍江省視学属通維、省教育会長で省立日本語専修学校兼農科職業学校長干敬修、省立第一師範付属主事李保全からの出迎えを受ける。清水駅長、真島先生、ビューローの本村の案内を受ける。龍江公園内省立図書館に於いて同地の教育会からの歓迎会に招待される。
	ハルピン	駅で現地の内地人、満洲国官民多数の各位からの出迎えを受け、夜に東省特別区前区教育会主催の満洲国官民学校長多数が参加した招宴に招待される。
	大連	田中清之助、夫人及小学校長関山勝三氏の出迎えを受ける。
	奉天	南満中学堂校長安藤基平氏、同教諭三村歆次氏の出迎えを受ける。
	チチハル	石田氏の出迎えを受ける。
	吉林	岩田広次氏から案内や食事の招待を受ける。
	新京	海村円次郎及び小林氏の出迎えと宴会を受ける。
	京城	森為三氏及び真継義武氏の出迎えと宴会を受ける。
	大邱	片木氏をはじめ、兵庫県人会の多数の出迎えを受ける。
1934年 （昭和9）年	京城	駅で森為三、朝鮮教育会からの出迎え、総督府で食事の招待を受ける。
	平壤	兵庫県人会の出迎えを受ける。
	撫順	ビューローから炭坑の説明を聞く。
	錦県	姜秘書官から支那料理の招待を受ける。
	奉天	南満中学堂教諭三浦及びビューローの見学案内を受ける。
	北京	憲兵分隊、岸本氏の出迎えを、新聞聯合社山上からの招宴を受ける。
	天津	兵庫県人会の出迎えを受け、歓迎会に招待された。県人の案内プランにより日・英・仏・旧独逸の租界などを視察。
	大連	満鉄本社教習所講師田中氏、羽衣高女教師阿山氏、満鉄本社部学務課の黒田氏の出迎えを受ける。

〔注〕『兵庫教育』第516号（1932年10月15日）、113～117頁、同第518号（1932年12月15日）、71頁～89頁、同第519号（1933年1月15日）、47頁～68頁、同第526号（1933年8月15日）、205～218頁、同第540号（1934年10月15日）、141頁～172頁より筆者が作成。

1931(昭和6)年事変後には湯山城駅で駅長および巡査3名が「馬賊」に殺されたと記された<sup>44</sup>。このような危険な環境であったにもかかわらず、視察旅行は予定どおりに実施された。それは「列車に直面して十米置位に武装した警護の我が兵が居並ぶ」<sup>45</sup>と記された関東軍による保護のほか、植民地支配の強化にしたがって形成された現地日本人のネットワークによって視察旅行が支えられたためであった。現地日本人はどのように視察旅行を支えたのか。その詳細を整理したのが表5である。

表5によると、視察旅行の斡旋や日程の相談、案内を担当するジャパン・ツーリスト・ビューロー<sup>46</sup>をはじめ、朝鮮総督府や関東軍司令部、領事館、「満洲国」国務院などの官庁、現地の教育会、県人会などの民間組織、現地の日本人教師、視察者の知人や親戚が、駅での送迎や食事の世話、案内、視察先の紹介などを通して視察旅行全般を支援していた。

たとえば現地の日本人の支援について、視察者は「吾人のうれしく感ずることは知らぬ土地に行ったとき親切な知人郷土人、さては縁戚の人々の出迎えや訪問を受くることである」<sup>47</sup>と、現地日本人の支援に感謝した。1933(昭和8)年の視察旅行では、視察者たちは現地で軍、「満洲国」の関係者、兵庫県人会のメンバーなど計83人と交流した<sup>48</sup>。「満洲国」建国前の視察旅行と比べると、明らかに視察旅行を支援する現地日本人の組織が増加したことがうかがえ、かかる現地日本人ネットワークによる支援が視察旅行を成功させた要因であった。

「満洲国」建国前の視察旅行と比べて、注目すべき特徴は視察旅行を支える旅行機関の役割が拡大したことである。1930年代における国際観光事業の発達は視察旅行の進行を支える重要な存在であり、たとえば表5に示したように、ほとんどの視察都市でジャパン・ツーリスト・ビューローが出迎えから案内にいたるまで視察旅行を支援した。ある視察者は「旅行上第一心使いは如何にせば短時間にたやすく能ふ限り多くを視察し得るかということにある。処が世界観光局の設けが漸次備って以来此の心配が少なくなって……今回満蒙の旅に上がって此のビューロー網の愈々緊密に張られて来たことを満蒙認識上特にうれしく感じた」<sup>49</sup>と観光産業の発展が視察旅行にもたらした存在価値について述べた。「世界観光局」とは、1930(昭和5)年4月外国人の観光客誘致を目的として初めての官設中央機関として創設された国際観光局である。対外観光宣伝の実行機関、ジャパン・ツーリスト・ビューローは、1942(昭和17)年8月に廃止されるまで国際観光の振興を牽引した存在であった<sup>50</sup>。「ビューロー網の愈々緊密」とは前述のジャパン・ツーリスト・ビューローのことであり、満洲事変が勃発するまで大連支部は「満洲」を含む中国大陸の大都市に、案内所(12ヶ所)、出張所(5ヶ所)、代理店(7ヶ所)という旅行斡旋網を張り巡らせ、従業員数は計91名に達し、視察旅行を支援する中心的な役割を果たした<sup>51</sup>。

このように「満洲国」建国後、現地日本人のネットワークが現地に広がり、さらに1930年代の国際観光の発展にともない視察旅行を順調に進行することができるようになった。あたかも国内旅行のように視察旅行が快適に進められたのは、実質的植民地支配が確固となっていた

ことを意味しているのであろう。

#### IV 視察者たちの「満洲国」認識

##### 1 要人の講話にみる視察者たちへの期待

上述のように「満洲国」建国後の視察旅行の目的は、満洲事変および建国の意義を認識することに重点が置かれ、視察旅行のルートや視察場所は緊密にこれらと関連して企画された。そのなかでも「満洲国」要人の講話は極めて重要であった。各年度の視察旅行で受けた講話は表6のとおりである。それによると、講話者は軍や領事館、満洲国国務院の関係者などであった。講話の内容は満洲事変の経緯、「満洲国」の治安・教育・建国理念・移民問題・中国人の国民性など多岐にわたった。そのうち「満洲国」の治安問題、満洲事変および「満洲国」建国の意義、移民問題は「満洲国」が直面する課題であったため、それに関する講話が最も重視された。「満洲国」の治安問題について講話者は視察者たちに何を話したのだろうか。1932（昭和7）年ハルピンで、視察者たちは第十師団司令部師団長から治安問題に関して次のような説明を受けた。

新満洲国の政権未だ全滿に徹底せず匪賊がしきりに横行して居る此の際、満洲の実状を知らない内地の人が、新国家成立という声だけを聞いて満洲全土が平和境になったと早合点して目的もなしに満洲に流れ込むことは非常な間違いであるし又我對滿政策の邪魔にもなるから此の点内地へかえったら充分御伝達を乞う<sup>52</sup>。

これによると、日本国内において「満洲国」観の内情が正確に理解されていないこと、つまり依然として政情不安が続いており、安易に渡滿されることは「對滿政策の邪魔になる」ことに等しい。

建国理念については、新京国務院総務局長西山と「満洲国」国務院総理鄭孝胥の「王道主義」に関する講話についての記述が視察報告書のなかに多く見られ、視察者たちの注目を集めた講話であったということがうかがえる。西山は、「王道は支那に於いて唱道せられたが其実はなかつた之を滿蒙の新国家に実現することになるから教育も之を根蒂となし体得せしめるにあること、王道は教育を離れて王道なし、道徳の上に政治が行われるのが東洋精神文明の特徴であること而て満洲は独立の国家である」<sup>53</sup>と述べ、「王道主義」が中国で唱えられたが実現されておらず、教育の力によって「満洲国」において徹底的に実現させることを強調した。

次に鄭は、「從來中華民國の悪政の爲めに教育は単に三民主義の爲め国民党の爲め排外の爲め、又党争を事とする思想に禍されたのである」と、中華民國期の教育は党化教育であったとその内容を批判し、「満洲国は建国以来此等の誤れる思想を打破し、建国王道主義の教育を樹

表6 視察地における講話一覧

年 度	講話関係者	講話内容
1932 (昭和7)年	朝鮮総督府視学官 藤谷	朝鮮教育の概要
	奉天関東軍司令部軍属 広田	満洲事変の経緯
	長春領事館領事 田代重徳 *1	満洲事変の当時から満洲国成立の経緯
	吉林多聞司令部高級副官 不明	鉄道沿線の匪賊の防備
	ハルピン第十師団司令部師団長 不明	北満警備状態
	関東庁視学 奥田十太郎	関東州における教育
1933 (昭和8)年	チチハル第〇〇師団	匪賊討伐等軍務の情勢について
	満洲国文教部総務司長 西山政猪 *2	満洲国経綸の遠大なる国策
	ハルピン第十師団参謀長 加納豊寿 *3	満洲の重要性、満洲国の治安維持、匪賊の内容と討伐の方針と情勢、警備および民性に対する留意、王道立国の本義
1934 (昭和9)年	朝鮮総督府視学官 張 教育主事 北川	朝鮮教育の現状
	奉天 満洲事変の実戦経験軍人	満洲事変発端の経過
	満洲国総理 鄭孝胥	満洲国建国と王道主義の教育
	満洲国文教局次長 許汝棻 *4	不明
	満洲国文教部編審官 福井優	満洲事情
	錦県県参事 上杉益喜 *5	日満関係、満洲国民の心理状態新政府に対する感情、漢民族の長所、県治行政、満洲国移民の問題点
	北京駐屯軍司令部中佐 長谷川	現地における日本軍の現状
	北京日本公使館武官 柴山兼四郎 *6 一等通訳官 原田	日支外交関係、北支那政局の趨勢、張学良の満洲問題観 支那の国民性、最近の時局問題

[注] 『兵庫教育』第516号(1932年10月15日)、113~117頁、同第518号(1932年12月15日)、71頁~89頁、同第519号(1933年1月15日)、47頁~68頁、同第526号(1933年8月15日)、205~218頁、同第540号(1934年10月15日)、141頁~172頁より筆者が作成。「\*」史料には苗字或いは役職しか記録されていないため、別途の史料で判明したものである。

\*1 田代重徳 JACAR (アジア歴史資料センター)、Ref: B05015780100 第9番目の画像「満支人本邦視察旅行関係雑件/便宜供与関係 第四巻」,「満洲国少女使節派遣 昭和七年六月」,外務省記録,外務省外交史料館。

\*2 西山政猪 JACAR (アジア歴史資料センター)、Ref: B05015568200 第160番目の画像「満洲国文教部派遣留学生関係雑件第一巻」,「文教部派遣留学生補給 自昭和八年 分割1」,外務省記録,外務省外交史料館。

\*3 加納豊寿 JACAR (アジア歴史資料センター)、Ref: C01005314600 第1画像「昭和8年「陸機密大日記 1/4」,「戦時諸条規調弁不能品調弁依託の件」,陸軍省大日記,防衛省防衛研究所。

\*4 「満洲国行政官事典」<http://homepage1.nifty.com/kitabatake/mansyu.html>。

\*5 上杉益喜 JACAR (アジア歴史資料センター)、Ref: B04011812400 第184番目の画像「在外日本人各学校関係雑件/在満ノ部/錦州国民学校」,外務省記録,外務省外交史料館。

\*6 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』(東京大学出版会,1991年)73頁,柴山兼四郎:昭8.5支那公使館付武官補佐官(北平)

立せねばならぬ急務にあるのである思うに従来の教育は体育に智育には相当進んでいたが徳育は割合に進歩しなかった。これでは東洋文化を發揚することは出来ぬと考える。如何にもして徳育をもっと重視せねばならぬ」と述べ、中華民国における教育方針の問題点を指摘したうえで、徳育を重視する「満洲国」の教育方針こそ東洋文化を發揮することができると主張した<sup>54</sup>。

二人の講話は、ともに中華民国との対比をとおして「満洲国」における「王道主義」を強調した。その背景には、駒込武によれば「王道主義」という建国理念を創出する際、その発想の源泉の多くは孫文の思想から得られており、蒋介石・張学良が支配する中華民国の「霸道」のもとで、孫文の理想である「王道」は実現できず、「満洲国」の建国によって「王道」を実現させるという「満洲国」正当化の根拠があったからである<sup>55</sup>。「満洲国」指導者側の講話や前述の張学良別邸の視察などは、まさにこのような中華民国の「霸道」を視察者に確認させることによって、「満洲国」の「王道」を高く評価する効果が期待されていたといえよう。

移民問題に関しては、錦県で上杉参事官の講話を受けた。その講話は、「現在錦県に在住する三千余人の中には聞くも羞かしき者のあることを聞き国家として由々敷き大問題なりと思つた。所謂満洲ゴロと称する彼等に対しては国策上からは嚴重に取り締まらねばならぬ<sup>56</sup>と移民が取締の対象となったほど当時の満洲移民には問題が大きかったことがうかがえる。

満洲移民事業は、1932（昭和7）年関東軍と加藤完治らによって開始された政策であり、この講話が行われた1934（昭和9）年は、「試験移民期」（1932〈昭和7〉年～1936〈昭和11〉年）といわれた時期であった。この時期の移民のほとんどは東北・信越・北陸地方を中心とした東日本の数県で連合して編成され、その応募資格も1934（昭和9）年までは在郷軍人に限られていた<sup>57</sup>。関東軍の企画によって送出されたこれらの人々は必ずしも期待に添う「王道楽土」の開拓者ではなく、「満洲ゴロ」といわれ取締の対象とすらなつた。この講話を受けて、視察者は視察報告書に「有為有能の日本人官吏、教育者、技術者、熟練工、真面目なる農村移民等を必要とせらるる<sup>58</sup>と移民にふさわしい人選の必要性を記した。「満洲国」建国直後の関東軍による急速な移民政策の問題点について、視察旅行を介し警告を発していると思われる。

このように、「満洲国」指導者側は、治安・建国理念・移民という直面する課題について講話を行い、その方針や問題点を指摘し、日本国内に伝えることを視察者たちに示唆したのである。

## 2 「満洲国」に対する視察者たちの認識

視察者たちはどのように「満洲国」を認識していたのか。視察報告書による認識には、「王道主義」と「匪賊横行」との二つの側面をもつ「満洲国」があった。まず「王道主義」の理想的国家とする「満洲国」について、視察者は次のような認識を示していた。

今や満洲国は康徳陛下の英明に加ふるに百官有司の忠誠なる輔翼と上下国民の勤勉努力に

依り、各般の建設事業が大いに進展し、世界の有識者をして驚異の感を懐かさしめつつあるのであるが、元来満洲国は今日の欧米列強より遙かに長き歴史を有し文化に於いても道德に於いても卓越し繁栄せる民族であるから今日の進歩はむしろ当然の結果であると思はる。更に満洲国の発達を援助しつつある我が日本は畏くも大詔の精神に基づき東洋永遠の平和否世界の平和に貢献せんとする以外何等意図を蔵するものならざるが故に我が対満国策は実に公明正大である。さればこそ殆ど三千万民衆は等しく鼓腹して親政に悦服して理想国家の完成に邁進しつつあるのである<sup>59</sup>。

この「満洲国」認識について、次の二つの特徴を指摘することができる。一つは、「満洲国」建国後、各方面の事業が驚異的發展を遂げ、その成果は「満洲国」自身の歴史によると見做したことである。このように「満洲国」自身の歴史を認めることによって日本による「満洲」領有の企図を批判していることがうかがえる。

いま一つは、日本による「満洲国」占領ではなく、支援の実施こそが東洋の平和に貢献する正当な行為であると確認したことである。しかし支援と言いつつも「大詔の精神に基づき」という記述に示されるように、あくまで日本の指導精神による「東洋平和」であった。

山室信一によれば、日本の指導精神による「東洋平和」という認識は、石原莞爾を中心とする関東軍が唱えた満蒙領有正当化論が案出された際の論理であり、関東軍による張作霖爆殺から実行された満蒙領有計画が失敗した後、この論理は「建国理念という形に転化して噴出してくるのである。しかし、それは関東軍の満蒙支配の目的が変わったということをしさかも意味しない。満蒙領有論で挙げられた目的とその目指した射程、それらが満洲国が関東軍の指導下にあるかぎり払拭されるはずはなく、満洲国経営の基軸となり指針となっていたのである」<sup>60</sup>。かかる関東軍の論理は「満洲国」建国理念の支柱であり、「満洲国」だけではなく日本国内にも広がり、さらに要人の講話を通して視察者たちに深く浸透していた。

これは1934(昭和9)年の視察感想であり、日本が「満洲国」の承認問題をめぐって聯盟を脱退した翌年にあたる。そのため「何等意図を蔵するものならざるが故に我が対満国策は実に公明正大である」という記述に示されたように、視察者は「満洲国」建国の正当性を訴えていた。その意味で、視察旅行は視察者たちの「満洲国」認識を固めさせたとともに、聯盟脱退という時期に少なくとも日本国内に「満洲国」建国の意義を理解させる一翼を担ったといえる。

一方、視察報告書のなかに治安の悪い「満洲国」のもう一つの側面が伝えられた。前述の要人の講話にも示されたように、「満洲国」建国後においては、中国側の反発や「馬賊」の横行などさまざまな問題が存在しており、現実の「満洲国」は理念に掲げられた「王道楽土」とは異なっていた。視察者たちが視察した都市、利用した駅、視察した場所などで治安は混乱しており、厳戒体制の状態が存在した。たとえば奉天駅の周囲には、「鉄条網が張り回らされてある……如何にも物々しく、重い冷たい空気がただよって、不気味なこと此上ない」<sup>61</sup>と述べられ、

「馬賊」の襲撃を警戒している奉天駅の様子が伝えられた。「満洲」の第一名山で、古来文人墨客の足跡の絶えなかった千山は、「事変後はこの地形を利用して附近に馬賊匪賊が立てこもり、満鉄本線沿線中で最も危険な所となって居る」<sup>62</sup>と満洲事変後は「匪賊」の拠点となり危険な状態になっていた。ハルピンは「全く平和の都ではなかった。全く戦時状態戒厳令下の物騒な都市であった。窓を鉄板で固めた総領事館、師団司令部、日本人小学校我等の訪ふた所で、平和気分ゆるんだ所は一箇所もなかった」<sup>63</sup>と述べられ、緊迫した雰囲気を感じられる。

このように視察者たちの目に映った「満洲国」の現実には、必ずしもその理念に掲げられたような「王道主義」の国ではなく、常に中国による抵抗を意識し厳しい警戒状態に置かれていた。視察旅行は皮肉にも支配者層の予想を超え、「王道主義」の理念とは異なり、中国側の根強い反撥と治安の悪化が深化する「満洲国」の実態もまた日本に伝えられた。

## V おわりに

本稿では、「満洲国」建国後における兵庫県教育会が実施した視察旅行を取り上げ、次の五つの点を明らかにした。

第一は、実施経緯と実施目的である。「満洲国」建国によって、視察旅行の手続きは「満洲国」建国前と比べると簡素となり、実施目的が中国の事情を認識することから、満洲事変の意義と「満洲国」の建国理念を認識することへ変化した。

第二は、視察旅行の実態である。視察ルートは「満鮮」に集中し、さらに朝鮮の視察が簡略化され満洲が重視された。視察都市の選定にも「満洲国」建国の意義を顕示する狙いが含まれていた。視察場所の特徴としては、①満洲事変の意義を理解するための戦跡視察が重視されたこと、②「満蒙生命線論」を教員に理解させるために多くの産業地を視察したこと、③史跡の視察が激減し、日満支の親善を物語る対象が増加したこと④日満教育者の親善をはかるという目的を達成するために多くの教育機関を視察したが、教育の実情を認識するだけでなく、ロシアや中国による「満洲国」建国に対する支持をアピールする意図が含まれたこと、⑤張学良学官邸の視察は、「霸道」の象徴を教員に参観させるプログラムを通じ、「満洲国」の「王道」への認識を深めさせる意図が含まれたこと、があげられる。

第三は、視察旅行に対する現地での支援が充実したことである。「満洲国」建国によって現地日本人のネットワークが迅速に広がり、視察旅行を支援する重要な存在ともなった。それに加え1930年代の観光産業の発展にともない、「満洲」で観光機関が多く設立されたことによって、従来と比べさまざまな手続きや現地での移動などがと容易となり、排日運動が頻繁に起こったにもかかわらず国内旅行に類似した安心感も得ることができた。

第四は、「満洲国」の要人の講話である。教員は「満洲国」各機関の関係者から講話を受け、その内容は「王道主義」の建国理念や、治安や移民などの建国を機に直面していた問題が中心

であった。講話者は教員を介し「満洲国」の現状の流布を願ったと同時に、無目的な渡満傾向(いわゆる一旗組など)の矯正効果を小学校教員に期待した。

第五は、教員自身の「満洲国」認識である。教員たちは講話を通じて「満洲国」建国が日本の「公明正大」な行為であり、「満洲国」が「王道主義」の国であるという認識を得ていた。一方視察報告書には中国側の反発が強く治安も混乱していた負の側面も記されている。教員は「満洲国」の要人が期待したとおりに「王道主義」の「満洲国」を伝えるとともに、支配者の予想以上に政情不安な「満洲国」の側面も日本国内に伝えたのである。

「王道主義」の建国理念と「満洲国」の現実とのギャップについて、視察した教員たちがどのように受け止めていたのか、さらに教育現場でそれをどのように教え子に伝えたのかに対する究明は、続稿での課題としたい。

【参考】1928年～1940年兵庫県教育会の実施による教員の「支那満鮮視察旅行」参加者一覧

年度	氏名	所属	職名
1928 (昭和3)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	岸原徳四郎	兵庫県	視学
	高谷一次	多紀郡篠山尋常高等小学校	校長
	西羅岩太郎	川辺郡川西尋常高等小学校	校長
	内尾政玄	神戸市林田商工実修学校	校長
	国分喜一	津名郡尾崎尋常高等小学校	校長
	生島芳三郎	武庫郡今津尋常高等小学校	校長
	北内久幸	多紀郡古市尋常高等小学校	校長
	小松百太郎	尼ヶ崎市第二尋常小学校	訓導
	梶原太寿郎	尼ヶ崎市尋常高等小学校	訓導
	滋谷治恵	尼ヶ崎市第一尋常小学校	訓導
	竹中庄作	明石市明石尋常高等小学校	訓導
	福井延一	有馬郡大沢尋常高等小学校	訓導
	喜多山一清	姫路師範学校附属小学校	訓導
	河南貞雄	御影師範学校附属小学校	訓導
1929 (昭和4)年	森 棟二	兵庫県教育会	主事
	山本貞之助	神戸市	視学
	入江栄太郎	宍粟郡神部尋常高等小学校	校長
	江口重吉	神戸市諏訪山尋常小学校	校長
	松田久之助	印南郡大塩尋常高等小学校	校長
	下仲幸吉	神戸市湊川尋常小学校	校長
	高島耕三	姫路市城南尋常小学校	校長
	谷口孫太郎	川辺郡稲野尋常高等小学校	校長
	米口高次	飾磨郡城陽尋常高等小学校	校長
	大西 要	氷上郡芦田尋常高等小学校	校長
	徳平貞一	多可郡西脇尋常高等小学校	校長

	細見兵吉	神戸市平野尋常小学校	校長
	林 春次	加古郡加古川尋常高等小学校	校長
	木本常吉	神戸市立第一高等女学校	教諭
	稲見国松	神戸市須磨裁縫女学校	教員
1930 (昭和5)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	森本俊治	西宮市立安井尋常高等小学校	校長
	坂井利七郎	養父郡八鹿尋常高等小学校	校長
	鳥居直光	印南郡米田尋常高等小学校	校長
	長岡直孝	出石郡弘道尋常高等小学校	校長
	鞍橋巳之助	神戸市神戸女学院	教諭
1931 (昭和6)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	絹巻彦蔵	多紀郡篠山尋常高等小学校	校長
	松井清助	印南郡大塩尋常高等小学校	校長
	榎 圭三	神戸市菊水尋常小学校	校長
	前川清五郎	武庫郡住吉尋常高等小学校	訓導
	滝川 昇	神戸市楠高等小学校	訓導
	三田圭市	姫路師範学校	教諭
	安藤則太郎	第三神戸中学校	教諭
	金光英夫	加古川中学校	教諭
1932 (昭和7)年	大塚勝治	兵庫県教育会	幹事
	高谷正義	兵庫県	視学
	常見勇蔵	神戸市西灘第一尋常小学校	校長
	中島節太郎	有馬郡三田尋常高等小学校	校長
	前田菊治	城崎郡豊岡尋常高等小学校	校長
	芦谷俊次	赤穂郡住吉尋常高等小学校	校長
	三宅照夫	朝来郡生野尋常高等小学校	校長
	坂本精一	武庫郡住吉尋常高等小学校	訓導
	植永定治	兵庫県三木高等女学校	教諭
	山田景行	神戸市女子商業学校	教諭
1933 (昭和8)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	生島芳三郎	兵庫県	視学
	谷口幹治	神戸市兵庫尋常小学校	校長
	崎谷繁太郎	武庫郡武庫小学校	校長
	近本清喜	出石郡小坂小学校	校長
	田畑広治	御影師範附属校	訓導
	中川精一	神戸市灘尋常小学校	訓導
	細見隆一	多紀郡福住小学校	訓導
	畠中長三郎	日置小学校	訓導
	藤原吉太郎	兵庫県立農学校	教諭
	朝枝敏之	兵庫県立工業学校	教諭
1934 (昭和9)年	江口重吉	兵庫県教育会	幹事
	阿部邦一	兵庫県学務課	課長

	嵯峨彌一郎	兵庫県	視学
	瀧本英八郎	灘高等小学校	訓導(商)
	有方節雄*	湊川尋常小学校	訓導
	柴原 稔	武庫郡山手尋常小学校	訓導
	蔭山忠雄	武庫郡本庄尋常高等小学校	訓導
	野木勇	兵庫県立農学校	教諭(正八位歩兵少尉)
	大鞠 保	兵庫県立尼崎中学校	教諭
	小島 修	尼崎市立商工実修学校	助教諭
1935 (昭和10)年	賀須井千	県立第二神戸高等女学校	校長
	芦田與兵衛	兵庫県御影師範学校	訓導
	大川與三郎	武庫郡住吉尋常高等小学校	校長
	唐津新蔵	赤穂高等女学校	校長
	上月順治	県立第三神戸中学校	教諭
	澤田貞太郎	兵庫県	視学
	菅原伯一	県立明石中学校	教諭
	濱 文次	県立尼崎中学校	教諭
	松本義雄	兵庫県(教育)	主事
1936 (昭和11)年	松村定雄	神崎郡福崎尋常高等小学校	校長
	上田義二	兵庫県教育会	副会頭
	稲川照三郎	兵庫県実業教育	主事
	原田悦太郎	兵庫県立上郡農業学校	校長
	志賀元八	兵庫県立伊丹中学校	教諭
	剣持茂美	灘中学校	教諭
	今井音治	西宮市立高等女学校	教諭
	尾本和栄	甲南高等女学校	教諭
	上野正雄	兵庫県師範学校	訓導
	林 英夫	城崎郡竹野尋常高等小学校	校長
1937 (昭和12)年	木村 麓	神戸市楠高等小学校	訓導
	森棟二	兵庫県教育会主事	主事
	川崎操	兵庫県明石女子師範学校	教諭
	坂上猪之助	兵庫県城北尋常高等小学校	校長
	小林音吉	兵庫県杉原谷尋常高等小学校	校長
	上屋元次郎	兵庫県雲部尋常高等小学	校長
	栗原武夫	兵庫県師範学校	訓導
	小森賢市	兵庫県楠高等小学校	訓導
	植田喜年	兵庫県住吉尋常高等小学校	訓導
1938 (昭和13)年	高田武夫	兵庫県本山第二尋常小学校	訓導
	森 棟二	兵庫県教育会	主事
	岡田良太郎	神戸尋常小学校	校長
1939 (昭和14)年	賀集富治	精道尋常小学校	校長
	森 棟二	兵庫県教育会	主事
	酒井栄太郎	兵庫県立第一神戸高等女学校	校長

	平出真九郎	兵庫県立豊岡高等女学校	校長
	将積茂二	兵庫県武庫郡宮川尋常小学校	校長
	南野英麿	美囊郡志染尋常高等小学校	校長
	宮崎賢治	多可郡重春尋常高等小学校	校長
	長谷川寿一	赤穂郡御崎尋常高等小学校	校長
	小畑哲夫	川辺郡園田第一尋常高等小学校	訓導
	田中 薫	氷上郡鴨庄尋常高等小学校	訓導
	南 正春	川辺郡立花第二尋常小学校	訓導
1940 (昭和15)年	絹巻彦蔵	加古郡加古川第一尋常高等小学校	校長
	橋本正三郎	尼崎市竹谷尋常小学校	校長
	東田正三	美囊郡淡河尋常高等小学校	校長
	船橋一雄	加古郡加古尋常高等小学校	校長
	山下元次	神戸市真陽尋常小学校	訓導
	横山義雄	西郷尋常小学校	訓導
	阿部 尚	荒田尋常小学校	訓導
	樋口繁一	多紀郡城北尋常高等小学校	訓導
中井哲彌	神戸市道場尋常小学校	訓導	

## 注

- 1 時期や旅行のルートの違いにより、「満韓旅行」、「満鮮旅行」、「支那満鮮旅行」などと呼ばれたが、本稿では統一して便宜上「支那満鮮視察旅行」という名称を使用する。
- 2 拙稿「1906（明治39）年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」（『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第1巻第2号，2008年）、「兵庫県教育会による『皇軍慰問支那満鮮視察旅行』に関する研究」（『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第2巻第1号，2008年）、「兵庫県教育会による小学校教員の『支那満鮮視察旅行』に関する研究―「満洲国」建国前を中心として」（神戸大学教育学会『研究論叢』第15号，2008年）、「1939（昭和14）年の『小学校教員満洲国及中華民国視察』に関する研究」（神戸大学国際文化学会『国際文化学』第20号，2009年3月）。
- 3 「知られざる大修学旅行」『日本経済新聞』2005年10月22日、「文化」欄。
- 4 1881年文部省令によって成立された半官半民の教育団体であり、全国聯合教育会、帝国教育会、各道府県教育会がある。国家の政策を支える権力の末端機構の性格をもっていた。
- 5 山室信一『キメラ―満洲国の肖像』中央公論社，1993年。野村章『「満洲・満洲国」教育史研究序説』，エムティ出版，1995年。山本有造『「満洲国」経済史研究』名古屋大学出版会，2003年。貴志俊彦，川島真，孫安石編『戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版，2006年。木場明志『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』柏書房，2007年。小林英夫『“満州”の歴史』講談社，2008年等々。

- 6 高媛「『二つの近代』の痕跡——一九三〇年代における『国際観光』の展開を中心に」(吉見俊哉『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社, 2002年), 同「『楽土』を走る観光バス——一九三〇年代の『満洲』都市と帝国のドラマトゥルギー」(吉見俊哉・小林陽一『拡大するモダニティ』岩波書店, 2002年), 同「『観光楽土』としての満洲——帝国の野外劇場」(中見立夫『満洲とは何だったのか』藤原書店, 2004年), 同「観光の政治学: 戦前・戦後における日本人の『満洲』観光」(東京大学, 人文社会研究科博士論文2004年), 同「ポストコロニアルな『再会』」(倉沢愛子『帝国の戦争体験』岩波書店, 2006年), 同「戦地から観光地へ——日露戦争前後の『満洲旅行』」(愛知大学現代中国学会編『中国21』Vo1.29, 2008年3月).
- 7 渡部宗助「中学校生徒の異文化体験——1906(明治39)年の『満韓大修学旅行』の分析」(『国立教育研究所研究集録』21, 1990年).
- 8 内田忠賢「東京女高師の地理巡検: 1939年の満州旅行(1)」(『お茶の水地理』第42号, 2001年), 同「東京女高師の地理巡検: 1939年の満州旅行(2)」(『お茶の水地理』第43号, 2002年).
- 9 伊藤健策「戦時期日本学生の修学旅行と『朝鮮』認識」(『国史懇話会雑誌』第46号, 2006年10月).
- 10 長志珠絵「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場——女子高等師範学校の『大陸旅行』記録を中心に」(駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂, 2007年).
- 11 阿部安成「大陸に興奮する修学旅行——山口高等商業学校がゆく『満韓支』『鮮満支』」(愛知大学現代中国学会編『中国21』Vo1.29, 2008年3月). 他に『彦根論叢』にも論文あり.
- 12 荒山正彦「戦前期における朝鮮・満州へのツーリズム——植民地視察の記録『鮮満の旅』から」(『関西学院史学』26号, 1999年), 同「戦跡とノスタルジアのあいだに: 『旅順』観光をめぐる」(『人文論究』50(4), 2001年2月), 「満洲観光の軌跡」(阪倉篤秀『さまざまな角度からの中国論』晃陽書房, 2003年).
- 13 『兵庫教育』第511号, 1932年5月15日, 巻頭.
- 14 兵庫県小学校本科正教員(男)の平均月給は, 1932年に80.032円, 1933年に79.479円, 1934年に80.384円であり, 最高月給は1932年に183円, 1933年と1934年に195円であった(『大日本帝国文部省第六十年報』下巻, 66頁, 『大日本帝国文部省六十一年報』下巻, 67頁, 『大日本帝国文部省第六十二年報』下巻, 67頁). 岩瀬彰『「月給百円」サラリーマン 戦前日本の「平和」な生活』(講談社, 2006年)によると, 当時月収百円のサラリーマンは余裕に生活できた. 1933(昭和8)年当時, 東大の年間授業料は120円, 慶応も120円, 早稲田が140円であった(51頁).
- 15 「高媛『楽土』を走る観光バス——1930年代の『満洲』都市と帝国のドラマトゥルギー」(吉見俊哉『拡大するモダニティ』岩波書店, 2002年)221頁によると, 満鉄は, 朝鮮総督府鉄道局と提携して, 1918年から満洲旅行を専門的に扱う無料相談機関である満鉄「鮮満案内所」を内地に設立し, 満洲事変までは東京・大阪・下関の3ヶ所しかなかったが, 1939年までに9都

- 市計10ヶ所に拡大した。1912年に鉄道院に創設された半官半民の斡旋機関ジャパン・ツーリスト・ビューローも「支那満鮮旅行」を斡旋した。
- 16 『兵庫教育』第534号, 1934年4月15日, 197頁.
- 17 『兵庫教育』第526号, 1933年8月15日, 「満蒙及朝鮮視察点描」(兵庫県主事・1933年視察团团長・森棟二(ペンネーム森星嵐)が執筆), 205頁~206頁.
- 18 『兵庫教育』第540号, 1934年10月15日, 「朝鮮, 満洲, 中国視察団旅行報告」(旅行日誌抄140頁~145頁, 御影師範学校訓導・畑尾秀一; 鮮満中国視察記145頁~173頁, 兵庫県立尼崎中学校教諭・大柄保; 満洲で拾った銀の問題173頁~176頁, 灘高等小学校訓導・瀧本英八郎が執筆), 171~172頁.
- 19 『兵庫教育』第518号, 1932年12月15日, 「満鮮視察記(二)」(兵庫県教育会幹事・1932年視察团团長・大塚勝治が執筆), 88頁.
- 20 『兵庫教育』第513号, 1932年7月15日, 204頁, 「匪賊出没常なき有様につき之を変更第二案であるハルピンより引き返し鞍山湯崗子を視察することとな」.
- 21 注18)に同じ, 160頁.
- 22 『兵庫教育』第519号, 1933年1月15日, 「満鮮視察記(三)」(兵庫県教育会幹事・1932年視察团团長・大塚勝治が執筆), 67頁.
- 23 注18)に同じ, 150~151頁.
- 24 『兵庫教育』第517号, 1932年11月15日, 「満鮮視察記(一)」(兵庫県教育会幹事・1932年視察团团長・大塚勝治が執筆), 125頁~126頁.
- 25 注22)に同じ, 51頁~52頁.
- 26 注19)に同じ, 77頁.
- 27 注18)に同じ, 156頁.
- 28 注18)に同じ, 161頁.
- 29 注18)に同じ, 162頁.
- 30 注19)に同じ, 74頁.
- 31 注19)に同じ, 71頁.
- 32 注19)に同じ, 73頁.
- 33 注18)に同じ, 143頁.
- 34 注18)に同じ, 164頁.
- 35 注18)に同じ, 155頁.
- 36 注22)に同じ, 54頁.
- 37 1928年関東軍参謀となり, 「満蒙問題解決案」の中に「満蒙領有論」を打ち出した。(古屋哲夫『日中戦争史研究』吉川弘文館, 1984年).
- 38 『日本研究』第32号, 国際日本文化研究センター2006年3月, 104頁.

- 39 注17) に同じ, 211頁.
- 40 注19) に同じ, 83頁.
- 41 注19) に同じ, 71頁.
- 42 注19) に同じ, 75頁.
- 43 名称どおり騎馬の機動力を生かして荒しまわる匪賊のイメージが強かったが, もともと中国民間における自衛組織のなかの遊撃隊のような組織であった。しかし清末「満洲」では, 清朝の衰退によって治安が悪化しており, 民衆は自衛組織を作り, 盗賊に対抗していたが, 混乱が進むにつれ力を持った「馬賊」が本来の「自衛」を越えて盗賊的な行為も行う場合があった。渡辺龍策『馬賊』（中央公論社, 1964年）25頁～48頁によると, 『馬賊』という言葉は日本人が名づけ流布した名称であった。最初は「徒党を組んで馬を駆り, 盗みかつ殺戮するという, その賊としての一面が誇張的にとらえられているよう」であったが, 日露戦争後そのイメージが変化した。すなわち日露戦争期に, 日本軍が「満洲」で特別工作のために日本人や中国人を収集し, 主として鉄道破壊などを目的に結成された満州義軍や特別行動班が活躍したことによって, 日露戦争終結後に「馬賊」という言葉は華々しい響きをおびて宣伝された。
- 44 注24) に同じ, 130頁.
- 45 注24) に同じ, 128頁.
- 46 現在のJTBの前身であり, 1912年に満鉄の後援のもとに設立され1926年に大連支部から独立したジャパン・ツーリスト・ビューローの大連支部である。
- 47 注17) に同じ, 210頁.
- 48 注17) に同じ, 215～218頁.
- 49 注17) に同じ, 210頁.
- 50 高媛『『二つの近代』の痕跡——1930年代における『国際観光』の展開を中心に』吉見俊哉『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社, 131頁.
- 51 高媛『『新天地』への旅行熱（上）——『満韓巡航』から『鮮満の旅』へ』『観光文化』25巻1号, 2001年11月, 31頁.
- 52 注19) に同じ, 83頁.
- 53 『兵庫教育』第525号, 1933年7月15日, 208頁.
- 54 注18) に同じ, 158頁.
- 55 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店, 1996年, 287～291頁を参照した。
- 56 注18) に同じ, 160頁.
- 57 蘭信三『『満州移民』の歴史社会学』行路社, 1994年, 45頁.
- 58 注18) に同じ, 172頁.
- 59 注18) に同じ, 171～172頁.
- 60 山室信一『キメラ—満州国の肖像』中央公論新社, 2006年, 60頁.

61 注24) に同じ, 128頁.

62 注19) に同じ, 86頁.

63 注19) に同じ, 81頁.

### 【主要史料及び参考文献】

#### 【1932年視察報告書】

『兵庫教育』第517号（1932年11月15日）, 「満鮮視察記（一）」（113頁～136頁）.

『兵庫教育』第518号（1932年12月15日）, 「満鮮視察記（二）」（70頁～88頁）.

『兵庫教育』第519号（1933年1月15日）, 「満鮮視察記（三）」（47頁～68頁）.

#### 【1933年視察報告書】

『兵庫教育』第526号（1933年8月15日）, 「満蒙及朝鮮視察点描」（205頁～218頁）.

#### 【1934年視察報告書】

『兵庫教育』第540号（1934年10月15日）, 「朝鮮, 満洲, 中国視察団旅行報告」（140頁～176頁）

『大日本帝国文部省第六十年報』1932年.

『大日本帝国文部省六十一年報』1933年.

『大日本帝国文部省六十二年報』1934年.

蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』行路社, 1994年.

駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店, 1996年.

吉見俊哉『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社, 2002年.

山室信一『キメラ―満州国の肖像』（増補版）中公新書, 2006年.

国際日本文化研究センター『日本研究』第32号, 2006年.

愛知大学現代中国学会編『中国21』Vo1.29, 2008年.

#### [付記]

本稿の作成にあたり, 貴重な意見をよせていただいたお二人の匿名査読者に感謝申上げる. また, 2010年6月29日に立命館大学社会システム研究所で開催された「アジア社会研究会」でのコメント・批判に対しても大きな示唆を受けた.

Teachers' "Study Tours to China, Manchuria and Korea"  
by the Hyogo Educational Association  
— A Case Study After the Establishment of "Manchukuo" —

Anning Song \*

**Abstract**

This paper reveals the character of the "Study Tours to China, Manchuria and Korea" after the establishment of "Manchukuo", focusing specifically on case studies of study tours for teachers conducted by the Hyogo Educational Association. The purpose of these study tours was to make teachers understand the significance of the establishment of "Manchukuo". The destination of the study tours concentrated on places in Manchuria and Korea, and there were many trips to battle sites. Tours of historic sites were conducted, not to recognize the Chinese culture but to understand the significance of the establishment of "Manchukuo". A network of expanding Japanese communities in these destination areas existed, and the study tours were successfully conducted.

At the tour sites, teachers listened to lectures on the philosophy on which "Manchukuo" was established. Upon returning to Japan, teachers conveyed the "doctrine of *odo* (the kingly way)" of "Manchukuo" as well as the situation regarding public security.

**Keywords**

Manchuria, Manchukuo, study tours to China, Manchuria and Korea, teachers, Educational Association, *odo* doctrine (kingly way), Manchurian immigrants

---

\* Correspondence to : Anning Song  
Graduate School of Human Development and Environment Kobe University Ph. D. Program  
3-11 Tsurukabuto, Nada, Kobe-City, Hyogo-Prefecture 657-8501 Japan  
E-mail : song-a@st.ritsumeimei.ac.jp